

4. 現在の夢、そして願い

すでに実現した夢が、工房内におけるワークショップの開催である。そのために、採算を度外視して敷地内に工房を建てた。長い構想期間をへて4年前に実現した。完全予約制で国内外から幅広い年齢の人に足を運んでもらい、実際に「織り」を経験してもらっている。体験用に設置された織機は、明治後期に製作された足踏み機である。



工房の外観

明治期の織機は木製が基本であり、シャフトや歯車などの鉄製の主要部品が本体に取り付けられている。当時、織機を使うのは農家の女性が主であったため、比較的小柄の女性の体型に合わせて製作されていた。そこで武田正利氏は、老若男女の誰もが体験できるように工夫を凝らし、サイズ調整が容易にできるように手を加えた。

体験者には、工房織座の代名詞にもなっているマフラーを織ってもらう。織る時間は一時間程度だが、素材選びから糸選び、デザインの選定、製織前の準備（管巻き）、製織後の後処理（洗濯、アイロンがけ）を含めると半日コースである。これらの一連の作業は武田氏の指導のもとでおこなわれるため、素人でもまったく問題ない。出来上がったマフラーは、体験の思い出に持って帰ってもらう。



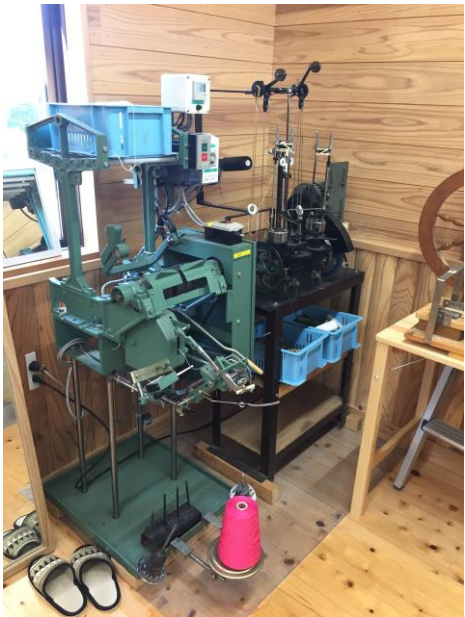
工房内に設置された足踏み機（左）

海外からの体験者（下）



工房内に設置された管巻き機（左）

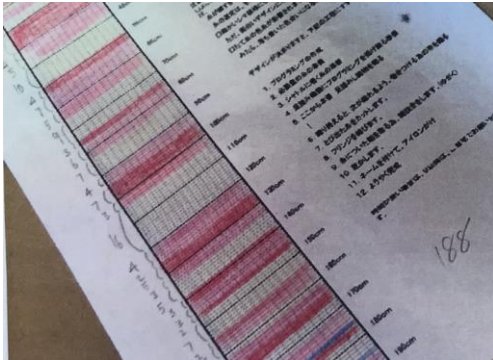
工房にはたくさんの色の綿糸が展示されており、この中から糸を選ぶ（下）



以前、ワークショップに参加した体験者のなかに、「（工房の）足踏み機を使って祖母から譲り受けた着物をリサイクルして^{さきおり}裂織してみたい」とリクエストした人がいた。それを聞いた武田氏が「どうぞ自由に使ってください」と伝えたように、織機は工房に来られる方すべてに開放されている。

図面は武田氏が作成（下）

夏休み課題として小学生が織ったマフラー（右）



本社敷地内には、ショップや工場も隣接している。来場者にはこれらも見学をしてもらい、今後も多くの人に織物の魅力やモノづくりの楽しさを発信していきたいと考えている。



ショップ内には季節に合わせて、さまざまな商品が並ぶ。見るだけでも楽しいショップ内




タオル織機の博物館をつくること

そして、武田氏のこれからの夢が、工房織座本店がある玉川町鬼

原にタオル織機の博物館をつくることである。前号で述べたが、テクスポート今治のなかに開設されていた四国タオル工業組合（現・今治タオル工業組合）のタオル資料館は、2017年4月にテクスポート今治のリニューアルの際に倉庫に移設されてしまった。つまり、今は見ることはできない。武田氏は、当時復元した歴代の織機の譲渡を組合に申し入れているが、復元織機は組合に所属するという理由で応じてもらえていない。

タオル資料館の設置は、武田氏が苦勞して復元したという思い入れもあるが、亡き宮崎氏の意味でもある。そして、タオルのモノづくりの歴史を知ってもらう機会を提供することは、タオルの産地である今治の役割であり責任であると、武田氏は考えている。ゴールは遠いが、夢の実現に向けて小さな歩幅で前に進んでいることは確かである。

願い

武田氏には、ひとつの願いがある。それは、工房織座を家族、従業員のみinnで守ってほしい、という願いである。玉川町鬼原は、過疎化問題が深刻であり、「限界集落」であると言われている。玉川町鬼原に工場・本店を構える工房織座の将来を考えると、マイナス要因であるが、武田氏は一度も移転を考えたことはない。しかし時代には逆行できないところもある。「娘たちも息子もここには住んでないんよね。ほんなら先々、ここの家は無くなるかもわからんのよ。家は無くなっても会社は残したい。村が滅びたとしても、会社は残したい」と武田氏は言う。武田氏の玉川町鬼原への思いは、本物である。

これからは、ゆとりのある人生を送りたい

若い頃から本を読む暇もなく、がむしゃらに働き、がむしゃらに

生きてきた。実は、数年前に病気を患い、手術が必要なほど体調を崩した。そのこともあって、今ではゆとりを持って人生を送ることを心掛けている。国内外に根強い多くのファンがいる工房織座。人気メーカーに成長した現在、仕事が入れば今も休む暇もなく工場で作業をする武田氏。それでも昔と違って、時間があるときは海釣りに出かけ、瀬戸内自慢の鯛を釣る。

釣りは昔からの趣味で、宮崎タオルに勤めていた頃から、時間ができれば海釣りに出かけていた。こうしたゆとりある時間を過ごすことが、今の目標である。

5. 大切にしていること

地元貢献すること

武田氏は、生まれ育った玉川町鬼原が大好きである。工房織座を立ち上げる際、迷うことなくここ鬼原を選んだ。しかし、創業以降、がむしゃらに働いてきたため、地元には直接貢献する機会がしばらくなかった。そこで、工房織座が軌道に乗ったタイミングを見計らって、地元貢献したいという思いから4年間自治会長を務めた。

現在は地元の要職には就いていないが、工房織座が年に1度開催しているイベントの売上の一部を地元へ寄付している。たとえば、2018年7月に愛媛県西部を襲った豪雨災害では、売上のすべてを寄付した。地元の人たちに愛されてこそ、工房織座の商品は生きる。武田氏の手から生み出される商品は、まさにローカルヒーローそのものである。（完）

参考文献

「今治スタイル」[2016] Vol.1、今治市産業部営業戦略課編。

「いいものはいいい職人が作る 職人インタビュー 愛媛県 工房織座
武田正利氏」リアル・ジャパン・プロジェクト

(<https://www.realjapanstore.com/fs/rjps/c/000000017503>)。

楫西光速『豊田佐吉』吉川弘文館、1962年。

編集後記

アメリカで確立した大量生産技術は、われわれ人類に圧倒的な量的豊かさをもたらしました。その恩恵は計り知れず、いまもこうしてほとんどの日本人が衣食住におけるモノの欠乏に苦しむことなく、生活を送ることが出来ます。大量生産技術に至る歴史には、あまり表立って語られませんが、数えきれない技術者たちの苦悩や無念、感動などたくさんの思いがあり、それらが積み重なり技術は少しずつ進歩してきました。

布を織る織機の歴史もそうです。手織り時代の長い時間をへて、生産性を高めるための技術革新が起きました。ボタン機、足踏み機、力織機、自動織機、そして現在もっとも生産性の上で頂点に立っているのが革新織機です。これらの道の途中にいた技術者は、数多くいます。あの豊田佐吉もそうです。

「織機の技術革新の歴史は、緯糸の処理の仕方の歴史である」と、教えてくれた職人・武田さんの言葉が目から鱗でした。武田さんの工房織座では、高い生産性を持つ革新織機を一切使わず、あえて生産性の劣る力織機のみを使ってマフラーを織ります。たった一本の緯糸でマフラーを織ります。だから、他の商品を寄せ付けない柔らかさと風合いが生まれます。いちど首に巻いたら、その心地良さから虜になります。

武田さんには夢があります。織機の歴史を、そして技術者たちの思いを伝える博物館をつくることです。かつてテキスポート今治の施設内に小さな資料館がありましたが、組合直営のショッップの売場面積を広げるため、いまはありません。そこには歴代のタオル織機が展示されていました。それらの織機は現存しないので、武田さんの手で復元されました。井上コマのヒゴ織りの織機や麓常三郎の二丁箆ボタン機などです。とくに、二丁箆ボタン機

の復元には、資料が残っていないため大変な労力を使いました。国立東京農工大学の科学博物館に「綿織物用」の二丁箆ボタン機の図面が残っていると聞き、同博物館に赴き図面のコピーをとり、麓常三郎が「タオル用」に改造したボタン機を想像しながら完成させました。

われわれ人類は、一途に効率性・合理性を求めるがゆえに技術は進歩を遂げてきました。しかし一方で、何でも利益優先でモノを大量につくり大量に消費・破棄し、モノづくりのプロセスや作り手の思いを軽視するモノ社会はいかがなものか。人の手で生み出されたモノには、作り手の熱い思いがあることを忘れてはなりません。経済効率を優先する社会を完全には否定できませんが、人間として大切なものを見落としている気がします。人間と他の動物を分けるのは創造力と想像力です。歴史は創造力の賜物であり、文化の伝承です。博物館復活に向けて何か力になれないか、と考えを巡らしています。

（辻）

次回の「タオルびと」

「タオルびと」の24人目は、(株)ヤスハラ代表取締役である安原史紀氏である。同社は、今治市に本社を構えるタオル向け染料のメーカーだが、現在は染料のみならず紙関連商品やプラスチック、環境関連材などの製造・販売もおこなっている。今治のタオル染色加工業者の間では優れた技術で評価の高いヤスハラであるが、同社を率いる安原氏に、染料とタオルについて話をうかがう。

